

# 一般入学試験 英語(A～D日程) 講評

## 【出題のねらい】

すべての日程において、出題は5つの大問から構成され、問題の種類や難易度はほぼ同じです。Iは350～500語程度の長文読解の総合問題です。IIはよく使われる日常会話での最適な応答を選ぶ問題です。IIIはテーマに沿った4つの項目の説明を読み、それに関する正誤文を選択する問題で、説明文に写真やイラストが添えられています。IVは基本的な語法や慣用表現の穴埋め問題、Vは7つの単語を並べ替える整序英作文です。全体を通して、一般的なコミュニケーションで使われる英語力を総合的に判定できるよう配慮した問題になっています。

## 【解答状況および解説】

**A日程** / Iはビデオゲームを用いて対戦するeSportsについての読解問題でした。全体的に正答率は高かったのですが、空所に最適な語を入れる問1の(6)では正答率が23%という、大変低いものになりました。eSportsの時代が到来しているという話の中で、promising(期待できる)を選択する問題でした。IIは口語的な会話表現を問う問題でしたが、全体的に正答率が高かったです。IIIは犬の写真を手がかりに4つの犬種についての説明文を読む問題でした。概ね高い回答率でしたが、本文の英語表現が選択肢の英文ではどのように言い換えられているかを読み解く力が求められています。IVの穴埋め問題も全体的に正答率が高かったのですが、(3)が31%の正答率でした。「北海道で生まれたので」という理由を表す分詞構文の使い方を確認しておきましょう。Vの整序問題は全体的に正答率が高かったのですが、(3)の「騒音に耐えられる」の並び替えでは誤答が多くなりました。put up with などよく使われる慣用句は例文を確認しながら、使い慣れておくといいいでしょう。

**B日程** / Iは人間の最良の友と言われる犬についての読解問題でした。身近な話題で読みやすい文章でしたが、問1の(6)の正答率は11%でした。話をすることができないペットの犬と飼い主との関係について、少くも謎があるのはいいことであるという筆者の主張を読み取り、mysteryを選ぶ問題でした。前後の文脈から、選択肢の語彙の意味をよく考えて最も適切な語を選ぶように心がけましょう。IIでは会話の流れを把握する力が問われていますが、(6)の正答率が39%でした。駅での待ち合わせについて話している場面でしたが、実際に話されている状況をイメージしながら、相手に待ち合わせの場所と時間を伝えられたらどのように反応するかを考えてみましょう。IIIは世界のお土産についての説明文でした。いくつかの土産品に共通する内容についての読解で不正解が多かったようです。IVの穴埋め問題は基本的な問題が多かったのですが、残念ながら多くの問いで正答率が低い結果となりました。Vの整序問題では、正答率が低い問題がいくつかありました。文法や慣用句など基本的なものを復習しておきましょう。

**C日程** / Iはネコカフェをはじめとするテーマカフェに関する文章の読解問題でした。全体的に正答率が高く、読みやすい英文でしたが、問1の(6)の正答率は14%でした。1950年代に「連れ戻してくれるような」という意味でbackが正解でした。IIの会話問題も全体的に正答率が高かったのですが、(5)の表現を選ぶ問題で正答率が低かったです。「オレンジジュースはまだありますか」という問いに対して「ご自由にどうぞ」というhelp yourselfが正解でした。日常会話でよく使われる慣用句は復習しておきましょう。IIIは日本にある世界遺産についての説明文の読解問題でした。dの「知床の沿岸には豊かな食物連鎖がある」を正解とした受験生が少なかったのですが、本文ではfood chainについて書かれていますので、よく読めば正解として選ぶことができる問題でした。IVの穴埋め問題では(1)の「報われる」(paid off)が難しかったようです。慣用表現は例文ごと覚えていくといいいでしょう。Vの整序問題では(4)の正答率が低かったです。「最もたべたい」(miss eating)の構文に気付けなかったようです。日頃から、文構造を考えながら作文をする習慣をつけましょう。

**D日程** / Iは読書に関するエッセイの読解問題でした。文字数が多く、やや難解な英文でしたが、全体的には内容把握ができていました。問3は正答率が低めでしたが、「剣に砥石が必要なと同じように、心には本が必要だ」という比喩がわかると、このエッセイの面白さを楽しめる問題でした。IIの会話問題は、正答率が大変高い問題が多かったです。(1)では「連絡を取り合いましょう」(Let's keep in touch.)に対して、「もちろん(連絡を取り合いましょう)」(I will for sure!)の流れが読み取れなかったため、不正解が多かったようです。会話の中での受け答えを推測する力を養ってほしいと思います。IIIは日本の伝統文化についての説明文でした。日本史の知識を活かせる馴染みのある内容であったため、内容理解がよくできていました。IVの穴埋め問題では、(6)(9)の正答率が25%でした。語彙、語法や慣用表現などは例文の中で学び、何度も使いながら使えるようにする学習が求められます。Vの整序問題は、丁寧に語句を組み立てていけば文にすることができる、取り組みやすい問題でした。

## 【受験生へのアドバイス】

英検準2級から2級レベルの語彙や慣用句、さらに会話でよく使われる英語表現を勉強するとよいでしょう。長文読解は、文章全体の流れを理解したうえで解答する問題が多いので、400～500語の英語論説文を読むことに慣れておくことが重要です。会話文も同様に、さまざまな場面における会話表現だけでなく、会話の流れを把握する力が必要になります。穴埋め問題、整序英作文問題の対策としては、英検準2級で出題されるような短文の語句空所補充問題、会話文の文空所補充問題などを解き、間違った事項をノートにまとめて覚える習慣をつけるとよいでしょう。

# 一般入学試験 国語総合(A～D日程) 講評

## 【出題のねらい】

国語総合の出題は、高等学校までの学習を踏まえ、基礎的な学習事項を十分に身につけているか、筆者の主張を正しく読み取る力を十分に養っているか、の2点の到達度をはかることを目的とし、併せて高等学校の学習を起点としながら、自主的な学習の成果が反映するような出題を心掛けています。問題は小問2題構成で、入試問題としてはやや長文となる問題文を掲げ、小問はそれぞれ10問前後となっています。漢字や語句に関わる出題の他、各大問の最後には問題文の内容の正誤を問う小問を設けています。この正誤問題は問題文全体の筆者の主張を正確に理解・把握することができているかを端的に確認するための出題であります。全ての設問が問題文に展開される筆者の主張を正しく理解しているかを様々な観点から問う内容になっています。個々の設問を正しく回答することがまた問題文の主張を正しく理解する方向に導かれていくというフィードバックを得られる構成になっています。問題文のジャンルは「説明文」を中心に扱いますが、明治以降の文章には一部に擬古文・漢文訓読文が含まれることがあります。

## 【解答状況および解説】

**A日程**／【問題一】は野矢茂樹氏『語りえぬものを語る』より、人間以外の動物ははたして人間のように「後悔」することがあるのか、という問題を扱った文章からの出題です。「分節化」という表現が意味するものを理解することがこの文章を理解する重要なポイントになります。【問題一】の各設問の正答率は安定的に高く、平均点を押し上げる結果となりました。「入試問題」の国語の解法に一定の習熟が反映されているものと推測されます。逆に解答の微妙な選択肢の判断ミスが合否判定に直接影響する局面にあったといえます。

【問題二】は澤村修治氏『日本マンガ全史』より、「マンガ」の要件・表現形式そして史的展開を扱った文章からの出題です。「マンガ」という馴染みのある対象を学問として探求していますので、大学での学びの一端に触れることができたかと思います。【問題二】についても、正答率が高く、丁寧に本文を理解していることがうかがわれます。「問三」については、「不適切なもの」を解答する出題でありました。「設問」それ自体の読解もまた入試問題の重要なポイントです。

**B日程**／【問題一】は渡辺政隆氏『科学で大切なことは本と映画で学んだ』からの出題です。タイトルの通り、映画『2001年宇宙の旅』の冒頭の一節から「科学」の諸問題を紹介し、その問題をさらに具体的な「本」を紹介する形で実践的に掘り下げています。まさに大学での学びの基本的なスタイルがここにあるといえます。「問二」は文脈に適合する四字熟語を選ぶ設問ですが、空欄  の正答率がとても低かったです。四字熟語は日常の学習や読書の中で蓄積していくことを心掛けてほしいと思います。また「問八」は本文の内容理解を測定するとともに重要な設問でありました。人類の居住

する環境の差違によって文明を発展させたという文脈を押さえ、結果として人類の人種・民族間差はこの環境の差違がもたらすことになってしまったという「皮肉」の理解が問われています。

【問題二】は光井涉氏『日本の歴史的建造物』からの出題です。日本に古い木造建築が多く残されている背景を、「歴史的建造物」という考え方の成立をめぐる問題として解説されています。私たちが何の疑問も抱くことなく「当たり前」と思い込んでいる文化のありように反省を促す文章となっています。特記事項として「問八」の文学史に関連する出題の正答率がとても低かったといえます。本学の国語総合の問題には文学史に関連するものが毎年必ず出題されています。例年、正答率の低い傾向がありますので、「国語便覧」などを用いた継続的で自主的な学習を心掛けて得点源にかえて欲しいところです。

**C日程**／【問題一】は小塩信司氏『性格とは何か』より、知能検査やフリン効果、そして「性格」に関連する内容の文章からの出題です。後半の時間横断的メタ分析という専門的な解析方法なども紹介されますが、初見の内容であっても、文章を丁寧に追うことで「書かれていること」が理解できる、ということ我问う出題となっています。「問一〇」の「ハ」については、ミネソタ多面人格目録と呼ばれる性格検査法を用いた性格特性の得点の変化に関する研究の成果から、近年になるほどメンタルヘルスに問題を抱えた若者が増加していることが「分かった」と断定する文章の正誤を解答する出題です。ミネソタ多面人格目録という検査は多面的に複数の性格特性を測定することはできません。それからは上記のような「結論」は得られません。複数の性格特性と時代の変化との関連性を踏まえて「推測」しているという文脈となっています。

【問題二】は鈴木公雄氏『考古学はどんな学問か』からの出題です。人類の文字の発明とそれによる記録によって成立する「歴史」と、文字以前の「考古学」という学問上の分類についての反省を促す内容となっています。大学での学びに進む受験生には、学問の世界における自己反省の在り方として、このような素材を通して興味・関心を高めてほしいと思います。「問一〇」の「二」の正答率がとても低かったです。産業革命時代の工場の跡地から発掘されるさまざまな道具の破片などに関する知識は、驚くべきことに今日では失われているという文脈です。それを解決するために「考古学」の知見をもって「無文字史学」としてのアプローチが「有効」であろうという筆者の見解を本文から押さえることで、「正解」が得られることとなります。

**D日程**／【問題一】は野家啓一氏『科学哲学への招待』からの出題です。「科学」という概念の成立と日本語の語彙としての「科学」との関係性、日本における「科学」の在り方を扱っています。入試問題などでは定番のテーマですので、そのような知識があると、それらとの比較によって筆者の独自の問題意識などを的確に見つけることができます。日頃の学習の蓄積がとても大切であるといえます。一般的に正答率が高かったため、細かなミスが合否に関わる、慎重さがことさらに問われる設問だっ

たといえます。中でも「問八」の正答率が低かった点が見過ごせません。日本語で「科学」という訳語が選ばれたその理由を選ぶ出題です。これは当時の「サイエンス」がどのようなものとして日本に伝わったか、そして日本語の語彙としての「科」という漢字の意味との整合性の中で選ばれたものでありました。

【問題二】は内田宗治氏『外国人が見た日本』からの出題です。私たちは「日本人だから日本のことは分かっている」と考えがちですが、むしろ外国人だからこそ見える「日本」があるという問題意識を持つことはとても大切です。これもまた入試問題では定番の「文化論」の出題だといえます。各設問の正答率が高かったことは【問題一】と同様でありました。最も正答率が低かったのが「問五」の「文学史」の出題でありました。文学史については、日頃の蓄積がとても重要になります。国語の教科書に登場した作家や作品を足掛かりに、是非、図書館などで関連する作品へと興味を広げてほしいと思います。そのような主体的な学びの姿勢が、大学での学びを特別なものにしていくことでありましょう。

## 【受験生へのアドバイス】

聖学院大学の国語総合の入試問題の対策は、説明文や論説文など筆者の主張を論理的にたどるような形式の文章に慣れておくことです。分野も歴史・文化・思想・経済・科学など多岐に渡りますので、様々な分野のトピックに関心を持つことがとても大切です。高等学校の授業で学んだ教材を起点として、関連する分野へと学びを深めていくと良いでしょう。文学史に関する細やかな知識も日頃の蓄積がとても大切になります。受験シーズン直前に「詰め込む」という方法は役に立ちません。様々な分野の様々な文章に触れ、読書を通して語彙を増やすことにも心掛けて下さい。「長文」の出題になりますので、ある程度の「速度」が求められます。日頃の読書経験が最大の「武器」になりますし、また大学進学後にも有効な「技術」となります。ある程度まとまった分量の文章から筆者の主張と自分自身の意見をはっきりと区別しながら読み取る訓練を継続して下さい。

# 一般入学試験 日本史B (A日程) 講評

## 【出題のねらい】

問題は、大問が3題、小問が35問で構成され、出題された時代区分は、古代史・中世史・近世史・近代史で、原始と現代史（戦後史）は出題されていません。出題分野は政治史・外交史・社会経済史・文化史と、幅広く出題されています。基本的な知識を中心に問われており、各時代の基本用語をまんべんなく学習できていたかどうか、重要でした。

### I

小問11問で構成されており、古代・中世の日中関係史が出題されました。「10世紀の出来事」や「鎌倉幕府の執権が行った政策」など、時期や人物の一致に苦戦した生徒が多かったようです。また、「山名持豊」と「山名氏清」や「洪武帝」と「光武帝」など、似た単語の区別を問うた問題の正答率がやや低かった傾向にあります。これらの区別を明確にして学習を進める必要があるといえるでしょう。

### II

自由民権運動や護憲運動など、近代における民衆運動を題材に出題されました。小問は12問で構成されています。第二次護憲運動で倒閣された内閣として、清浦奎吾内閣を問う問題が出題されましたが、正答率はそれほど高くありませんでした。現代史を含め、近代史は内閣と政策・出来事の一致が歴史の流れを理解するために、もっとも重要なことと考えられます。まずは、内閣と政策・出来事の一致を完成させることから、近代史の学習を進める必要があるでしょう。

### III

小問は12問で構成されており、古代から近世までの教育史が出題されました。文化史が中心の問題となりましたが、正文・誤文選択問題よりも、大学別曹や藩校の名称を問う単語レベルの問題で差がつかしました。大学別曹や藩校の名称は把握していたとしても、それが何氏・何藩の教育機関なのか、整理できている生徒が少なかったようです。比較されやすい単語の整理が必要であったといえるでしょう。

## 【解答状況および解説】

問題全体の正答率は49.25%でした。大問ごとにみると、大問Iが50.59%、大問IIが53.26%、大問IIIが44.01%でした。

すべての問題で出題された空欄補充問題では正答率は60.66%、一方、正文・誤文選択問題は41.14%となっており、正文・誤文選択問題12問のうち、8問は正答率50%を切っていました。このことから、基本用語の習得は当たり前になしつつも、正文・誤文選択問題の正答率を上げることが他の受験生に差をつける力になることが分かります。正文・誤文選択問題の誤文選択肢を大きく特徴ごとに分けると、①歴史用語が誤っているもの、②内容が誤っているもの、③時期が誤っているもの、の3つに分類できます。特に③のタイプの時期を問う問題を苦手としている生徒が多いようですが、今年は①のタイプの歴史用語が入れ替わっているタイプの問題の正答率も高くありませんでした。正文・誤文選択問題のなかでも①のタイプがもっとも誤りを見つけることが容易な問題だと考えられるので、まずは用語の誤りがないか、という目線で文章を眺めてみることをお勧めします。

## 【受験生へのアドバイス】

まずは基本的な知識を習得することに終始しましょう。日本史学習を進めていくと些末な知識が必要となる問題も出題され、受験生を惑わせることがあります。しかし、そのような問題が可否に関わる可能性は低く、本問も基本的な知識さえ身につければ、十分に合格点をとることが可能でした。ただし、中途半端な記憶だと、似たような用語の判別が難しくなります。類似した単語こそ、書き出してしっかりと整理が必要でしょう。

また、日本史学習では、教科書を傍らに学習を進めることが重要です。入試問題を解いていると、一見些末な知識が求められているように見える問題も、教科書にその内容が触れられていることが多々あります。まずは初心に戻って、問題を解いて、解答の根拠が分からなことがあれば、教科書で確認してみましょう。おそらくその疑問の多くを解決することができるはずです。

本問は、基本的な知識があれば対処できる問題が中心でしたが、近年、知識だけに頼らない思考力を用いた問題が増加傾向にあります。ただし、いくら思考型の問題が出題される可能性があるといえども、基本的な知識がなければ思考力を発揮することはできません。教科書をベースにしながら基本知識を身につけつつ、問題演習を通して思考力を養う努力をしていきましょう。

# 一般入学試験 日本史B (B日程) 講評

## 【出題のねらい】

問題は、大問が3題、小問が35問で構成され、出題された時代区分は、古代史・中世史・近世史・近代史で、原始と現代史（戦後史）は出題されていません。出題分野は政治史・外交史・社会経済史・文化史と、幅広く出題されています。基本的な知識を中心に問われており、各時代の基本用語をまんべんなく学習できていたかどうか、重要でした。

### I

土地制度をテーマに、古代史が出題されました。小問は11問で構成されています。土地制度を題材とした問題ではありませんでしたが、土地に直接関係する問題は2問にとどまっています。問1で穴埋めの選択式の空欄補充問題が出題されましたが、百万町歩の開墾計画を実施した政権担当者（長屋王）や、延久の荘園整理令を出した天皇（後三条天皇）を問う問題の正答率が低かったです。歴史を勉強するにおいて、まずはその時代の政治を主導した人物、そしてその人物に関わる政策や出来事を整理していくことが重要といえるでしょう。

### II

江戸の三大改革を題材に、近世史が出題されました。小問は12問で構成されています。最も正答率が低かったのは、問1の穴埋めの選択式の問題のうち、モリソン号を選択する問題でした。穴埋め問題は、空欄の前後からキーワードを探し出すことが重要です。本問では、「天保期」「アメリカ船」「浦賀沖や薩摩沖」がキーワードとなっていました。江戸時代は、選択肢にもなっていた「フェートン号」（イギリス船）や「リーフデ号」（オランダ船）など、外国船がよく出題されますので、どこの国の船であるかを把握しておく必要がありました。

### III

日朝関係史を題材に、古代～近代までが出題されました。小問は12問で構成されています。問8は内閣名とその内閣時の出来事が問われた、4文から誤文を選択する問題でしたが、やや正答率が低かったです。近現代の学習において、軸になるのは内閣とその順番です。内閣の名と、その内閣の政策や出来事とを合致させておく必要がありました。

## 【解答状況および解説】

問題全体の正答率は38.93%でした。大問ごとにみると、大問Iが43.18%、大問IIが36.46%、大問IIIが37.50%でした。

古代史から近代史（原始と現代史〔戦後〕は除く）まで、政治史・外交史・社会経済史・文化史とまんべんなく出題されました。全体的に時期を問う問題の正答率が低かったといえそうです。また、全体的に政権と政策を一致させる問題の正答率がそれほど高くありませんでした。歴史を理解するうえでも、基本となるのが政権担当者と政策や出来事の一致です。まずは基本となる問題の正答率を高めることを意識しましょう。時代ごとに政権担当者を抜き出したうえで、その政策や出来事を想起して整理する方法が有効です。教科書や資料集などを利用して、重要語句を整理してください。

## 【受験生へのアドバイス】

まずは基本的な知識を時代や分野に偏ることなく、習得する意識を持ちましょう。本大学の日本史は、全問マーク式の問題なので、漢字を正しく書ける必要はありません。正答を選択できるように繰り返し単語を選ぶトレーニングをする必要があります。

また、時代一致や文化名的一致、政権担当者ごとの整理も重要です。まずは歴史を大きな目で眺め、どの時代に誰が活躍したのかを整理してみましょう。人物を整理してから政策とリンクさせていく方法が有効です。

日本史学習などの暗記中心の科目では、インプットだけでなく、アウトプットをどれだけ行えるかが重要です。一問一答集などだけでなく、入試問題演習を実施することが重要です。本番を想定して、さまざまな形式の問題に対処できるようにしましょう。

最後に、本問は、基本的な知識があれば対処できる問題が中心でしたが、近年、知識だけに頼らない思考力を用いた問題が増加傾向にあります。ただし、いくら思考型の問題が出題される可能性があるといえども、基本的な知識がなければ思考力を発揮することはできません。教科書をベースにしながらか基本知識を身につけつつ、問題演習を通して思考力を養う努力が必要です。

# 一般入学試験 世界史B (A日程) 講評

## 【出題のねらい】

### I

テオドシウス帝の死を契機に395年に成立した東ローマ帝国(ビザンツ帝国)が、1453年に滅亡するまでの過程を概観したリード文を用いて、基本事項を中心に幅広く出題しました。全盛期であるユスティニアヌス帝の時代に関しては、旧ローマ帝国領の回復を目指して北アフリカのヴァンダル王国を征服したことや、トリポニヌスに命じて『ローマ法大全』を編纂したことなどを、また、中期から後期に関してはレオン3世による聖像禁止令の発布や、セルジューク朝の侵攻を機に十字軍が始まったことなどを中心に問いました。

中世の地中海世界を学ぶ上で、ローマ=カトリック文化圏・ギリシア正教文化圏・イスラーム文化圏の3つの世界が形成されていく過程は、非常に重要なポイントとなります。本問では、東ローマ帝国史を軸にギリシア正教文化圏が形成されていく過程についても理解できるようリード文の構成としました。現在、国際問題となっているロシア・ウクライナ問題を理解するうえでも、ギリシア正教文化圏について学ぶことは有意義であり、受験世界史のためだけではなく、グローバル化が進行する社会において、教養としても大切です。

### II

隋の建国から宋の滅亡までを概観したリード文を用いて、基本事項を中心に幅広く出題しました。入試頻出テーマである中国史を軸としながらも、安史の乱におけるウイグルや、靖康の変における女真族の金など、受験生が苦手としがちな中国周辺史についての知識についても問うています。

魏晋南北朝時代には、門閥貴族が高級官職を独占していましたが、隋の時代に官吏登用制度として科挙が施行されて以降、次第に貴族社会が崩壊し宋代には新たな支配階層として士大夫が台頭しました。こうした、隋から宋代にかけての社会変化については、中国史を理解するうえで非常に重要なポイントとなります。唐の太宗による律令国家体制の整備や宋代における社会・経済史など、幅広い知識を学習することで、日本とも関係が深い、隣国である中国についての理解を深めることは大切です。

### III

ペスト・天然痘・結核などの感染症の歴史をテーマとしたリード文を用いて、基本事項を幅広く問いました。コロンブスによるサンサルバドル島の到達を契機に、スペインがアステカ王国やインカ帝国を征服しましたが、その背景には天然痘が関わっていたこと、また、産業革命を機に社会がプラスの方向へと転換しただけではなく、環境の悪化により結核が流行したことなど、人類の歴史には疫病が深くかかわっていることを意識してもらうことを意図して作題しました。

現在、「新型コロナウイルス」が猛威をふるい続けており、先が見えない不安感の中での生活を余儀なくされていますが、歴史を紐解くと、感染症の拡大は決して珍しい現象ではなく、人類は多くの感染症に打ち勝ってきました。感染症に対する歴史を学ぶことで、現在の不安を打ち消し、希望に満ちた大学生活を送ってほしいという願いを込めて出題しました。

## 【解答状況および解説】

問題全体の正答率は60.7%でした。大問毎に見ると、大問Iが60.1%、大問IIが58.9%、大問IIIが62.8%でした。大問毎の正答率の差は少ないため、幅広い学習ができていたのではないのでしょうか。

一方で、正答率が14.2%と出来の悪さが目立った大問Iの問5が気になります。ヴェネツィアと同様に地中海貿易で繁栄した港市を選ぶ問題でしたが、60%以上の受験生が誤肢である「フィレンツェ」を選択していました。正答が「ピサ」ですので、フィレンツェとピサの位置が近いからこそその間違いだとは思いますが、中世のイタリアで登場する都市として、地中海貿易で活躍するヴェネツィア・ジェノヴァ・ピサ、内陸交易で活躍するフィレンツェ・ミラノの区別は必須事項です。特にフィレンツェは港町ですらないため、普段の学習から地図の確認を怠っていることが想像できます。地理的な情報は大切ですので、図版や資料集を用いた学習を日頃から意識づけしてほしいと思います。

## 【受験生へのアドバイス】

世界史は「縦の歴史」と「横の歴史」という2つの視点が重要となりますが、まずは「縦の歴史」の学習をしっかりと行いましょう。

例えば、アテネの民主政の確立過程について学習する際には「ドラコン→ソロン→ペイシストラトス→クレステネス」といった指導者の順番を確実にしたうえで「財産政治はソロン、民主政の基礎確立はクレステネス」といったように、指導者の事績を整理しましょう。同じく、アメリカの現代史を学習する際には「トルーマン→アイゼンハワー→ケネディ→ジョンソン→ニクソン…」と、大統領の順番をしっかりと覚えたいうえで、「マーシャル=プランはトルーマン、ジュネーブ4巨頭会談はアイゼンハワー」といったように、各大統領の事績を整理していくと理解が深まります。そうすると、「ケネディはキューバ危機でフルシチョフと対立した」という知識からケネディとソ連のフルシチョフが同時代の人物であるという「横の歴史」も少しずつ見えてきます。

# 一般入学試験 世界史B (B日程) 講評

## 【出題のねらい】

### I

フランス革命からナポレオン時代についてのリード文を用いて、基本事項を幅広く問いました。国民公会におけるジャコバン独裁の政治的内容や、総裁政府におけるパブーフの陰謀など、各政権についての事績が整理できているのかを問いました。またそれに付随し、19世紀のイギリスやプロセンについての同時代史についても問いました。

フランス革命で萌芽した「自由主義」・「ナショナリズム」という思想が、ナポレオンの征服戦争を契機にヨーロッパ世界に普及したことが、後のウィーン体制を理解するうえでのカギとなりますので、本テーマの学習は非常に大切です。

### II

黄河文明から北魏による華北の統一までを概観したリード文を用いて、基本事項を幅広く問いました。春秋・戦国時代における諸子百家や、前漢の武帝の事績、また東晋の王羲之など受験生が苦手としがちな文化史についても出題しました。

受験世界史は多くの国・地域について学習する科目ですが、その中でも中国史が占める比重は非常に大きいです。中国史を苦手とする受験生の多くは、そのスタート地点である古代史から躓いていることが多いため、本問はこの時代をテーマとしてリード文を作成しました。

グローバル化が進む現代社会のなかで、隣国である中国との関係性は今後も深まっていくことが予想されます。良好な関係を築いていくためにも、中国の歴史を理解することは大切です。

### III

イスラーム教の成立から分裂・拡大までの過程を概観したリード文を用いて、基本事項を幅広く問いました。ムハンマドの時代、正統カリフ時代、ウマイヤ朝、アッバース朝の時代順にイスラームの支配領域が拡大してなかで、「アラブ帝国」から「イスラーム帝国」へと社会が変化したことについて理解することは、イスラーム史を理解する際の土台となります。また、広大な支配領域を背景に、エジプト・インド・イベリア半島など、受験生が苦手としがちな同時代における横のつながりについても問いました。

かつてイスラーム国 (IS) が台頭した際、彼らが領有を主張する範囲が、西はイベリア半島から東はアフガニスタン・インド周辺地域にいたる広大な領域であったことから、世間から驚きの声があがりました。しかし、イスラーム史の知識があると、彼らが主張する領域はかつてのイスラーム勢力の支配領域であることがわかります。世界史を受験知識としてだけでなく教養として身に着けることで、現在起こっている様々な国際問題の根本を理解することが可能です。中東は国際対立が絶えない地域でもありますので、イスラーム史の理解は重要であると考えます。

## 【解答状況および解説】

問題全体の正答率は54.5%でした。大問毎に見ると、大問Iが62.0%、大問IIが49.9%、大問IIIが51.5%でした。大問IIは受験生が苦手としがちな中国史からの出題が中心であったことと、文化史からの出題があったことが、正答率を下げた要因かもしれません。特定の地域や時代・テーマに偏ることなく学習することが重要であるとともに、中国史は入試頻出テーマですので、苦手範囲とならないように学習を徹底したい分野です。

また、正誤問題の正答率の低さも気になります。正誤問題は受験生が混同しがちな知識を誤文とするのが一般的な作題の形式です。大問IIIの問5を例に見ると、「エジプトのイスラーム王朝について」の設問ですが、選択肢③の「トゥグルク朝には、イブン=バトゥータが訪れた」はエジプトではなく北インドに関しての文章のため誤文となります。つまり、問題作成者は同じイスラーム史でも「エジプト」と「北インド」という地域別の知識の整理ができていないかを受験生に問うために③の選択肢を作成したのです。このように、正誤問題の誤文には問題作成者の「意図」が含まれているので、今後、正誤問題に取り組む際には、正文ではなく誤文を見抜くことを意識するとよいでしょう。

## 【受験生へのアドバイス】

世界史は「縦の歴史」と「横の歴史」という2つの視点が重要となりますが、まずは「縦の歴史」の学習をしっかりと行いましょう。

例えば、中世のフランス史を学習する際には「ユーグ=カペー→フィリップ2世→ルイ9世→フィリップ4世」というカペー朝における主要な国王の順番を確実にしたうえで「第6回・第7回十字軍はルイ9世の時代、アナーニ事件はフィリップ4世の時代」といったように、それぞれの治世期における事績を整理しましょう。これに付随して、フィリップ2世とイギリスのジョン王が大陸領を巡って争ったことなどが把握できると、次第に「横の歴史」も理解できるようになってきます。

また、地理的な知識も大切です。世界史は科目の性質上、様々な国・地域について学習しますが、「今、地球上のどの地域の学習をしているのか」を地図的にイメージする習慣をつけましょう。教科書には「ライン川を越えて西進」や「バルト海沿岸地域」など、様々な地理的な情報が記載されていますが、その都度、資料集などを確認し、頭の中で民族の移動ルートなどをイメージできるようにすると、世界史の理解が深まるため、学習がはかどります。

# 一般入学試験 数Ⅰ／数Ⅰ・数A (A日程) 講評

## 【出題のねらい】

出題範囲は「数学Ⅰ」または「数学Ⅰ・数学A」です。大問数は5問で、第1問～第3問は「数学Ⅰ」からの出題で必須問題、第4問と第5問が選択問題になっています。第4問は「数学Ⅰ」、第5問は「数学A」からの出題で、いずれか1問を試験会場で選択解答し計4問を解答します。試験時間は60分、解答方式はすべてマークシート方式です。

第1問が「因数分解」、「式の値」、「絶対値付きの方程式」、「2次方程式」、第2問が「図形と計量」、第3問が「データの分析」、第4問が「集合と論理」、第5問が「整数の性質」からの出題でした。全体としての難易度は例年と同様で易～標準、高等学校の教科書の基本的な内容が理解できているかを問うのがねらいの出題です。

## 【解答状況および解説】

第1問は、数学Ⅰの式の計算や方程式に関する小問集合です。

(1)は、まずは2次式、さらに3次式の因数分解の公式を用いて6次式を因数分解していく問題です。 $x^3=X$ 等において $X$ の2次式 $X^2-7X-8$ を因数分解して $(X+1)(X-8)$ としたら、 $x$ の式に戻して因数分解の公式 $x^3 \pm a^3 = (x \pm a)(x^2 \mp ax + a^2)$ (複合同順)を用いて因数分解を完成させる頻出問題。難しくはないですが、質問が「 $a \sim f$ までの和を求めよ。」ということなので、最後の計算でミスをしてしまった受験生も多かったのでは。

(2)は、 $x + \frac{1}{x} = 3$ から $x^2 + \frac{1}{x^2}$ の含まれた式の値を求める問題。 $x^2 + \frac{1}{x^2} = \left(x + \frac{1}{x}\right)^2 - 2x \cdot \frac{1}{x}$ は基本的な計算なので、間違えの無いように計算して下さい。

(3)の絶対値付きの方程式は、一般的には、 $x < 2$ 、 $2 \leq x < 4$ 、 $4 \leq x$ の3つの場合に場合分けを行い、それぞれの条件を満たす $x$ の値を求める、意外に手間のかかる問題です。 $x$ の値が整数になることはわかっているので、 $x=1$ 、 $5$ は当てはめていても難しくありません。正解率も高かったようです。

(4)は2次方程式に関する基本問題。前半は因数分解を利用して2次方程式の解 $x=-6$ 、 $8$ を求めて小さい方の解 $-6$ を答えるだけ。後半は大きな方の解 $x=8$ を2次方程式 $x^2+ax-24=0$ に代入して $a$ の値を求めればよいだけで、正解率も高かったようです。

第2問は、三角比の図形への応用問題。(1)は、3辺の長さが与えられた三角形から1つの内角の余弦を求める余弦定理の基本問題です。 $\cos \angle ABC$ の値を求めることができれば、三角比の相互関係の公式 $\sin^2 \theta + \cos^2 \theta = 1$ を用いて $\sin \angle ABC$ を求め、さらに三角形の面積を公式を用いて求めるという代表的な問題ですが、このあたりは得点源にしたいところです。このタイプの問題は、後半から(2)のようにややオリジナリティーがある出題になっていくのが一般的ですが、(2)の前半は、三角形の1つの頂点から対辺に下した垂線の長さを求めるというポピュラーなもの。(1)で面積を求めているので、いわゆる「底辺×高さ×2分の1」という公式から、 $\frac{1}{2}AH \cdot BC = \frac{15\sqrt{7}}{4}$ として $AH$ の長さを求めればよいわけです。最後は、 $BH:CH$ を求めるのですが、 $BH = AB \cos \angle ABC$ 、 $CH = AC \cos \angle ACB$ となることは重要。 $BH$ の方は $\cos \angle ABC$ の値がわかっているので簡単ですが、 $CH$ の方は改めて $\cos \angle ACB$ の値を求めなくてはならないので、ひと手間かかります。

第3問はデータの分析のヒストグラムに関する問題。(1)の四分位数を求める問題は、答えやすいこともありましたが、正解率は高かったです。(2)の四分位範囲のとり得る値の範囲は、単純に第3四分位数と第1四分位数のとり得る値の範囲の差をとって $45-35 < x < 55-25$ を計算するだけで良いだけなので、確認しておいて下さい。また、(3)のヒストグラムで与えられたデータの平均の求め方(各階級の中央値×度数÷全度数)も今一度確認しておいてほしい重要事項です。

第4問は、不等式で表された集合と必要十分条件についての問題です。集合 $A$ の要素 $x$ の存在する範囲は不等式 $\frac{1}{2}x-3 < \frac{1}{3}x-1 < x-7$ で与えられていますが、(1)は、まずはその一部分 $\frac{1}{2}x-3 < \frac{1}{3}x-1$ を解くことで加算してくれるので、扱いやすかったのでは。(2)は絶対値のついた不等式の解を求める問題ですが、 $|x-7| < 3 \Rightarrow -3 < x-7 < 3$ は簡単に処理したいところ。(1)からここまでは、正解率も高かったですが、 $B = \{x \mid 4 < x < 10\}$ だから、 $\bar{B} = \{x \mid x \leq 4, 10 \leq x\}$ となり、不等号の $=$ (イコール)が落ちている解答が目につきました。また、(3)も同様で、 $a=5$ の場合も $B = \{x \mid 2 < x < 12\}$ となり、 $A \subset B$ となります。ここも $a > 5$ としてしまった誤答が目につきました。

第5問は、3進法に関する問題です。今回の入試は2022年度入試でしたので、他大学でも2022に関する出題が目につきました。本問は2022を3進法で表された数として出題されましたが、(1)は、まずは $22_{[3]}$ を10進法で表す基本問題なので、2進法や3進法の意味は今一度確認しておきましょう。 $2022_{[3]} = 2000_{[3]} + 22_{[3]}$ として前半を利用できる、やはり基本的な問題です。(2)は、一度10進法になおしてから再び3進法で表すことも考えられますが、このまま計算することもできるので、慣れておきたいところです。(3)の $A$ の桁数が8桁になることは、正確に計算しなくても予想はつくでしょう。本問に関しては正解率が7～8割であり比較的高かったのですが、2進法や3進法で表された数を10進法で表す、逆に10進法で表された数を2進法、3進法で表す簡単な計算は是非マスターしておいて下さい。

## 【受験生へのアドバイス】

まず、教科書レベルの問題は確実に解けるようにしておいて下さい。また、教科書準拠(傍用)の問題集も公式を使えるようにするための必須アイテムです。教科書と同じ会社のものを学校で配布されている方も多いと思うのですが、これらをしっかりと演習しておけば、今回レベルの入試問題の大部分に対応できます。

本学の過去問題は言うまでもなく、他大学で出題された問題を模試代わりに解くのもよい訓練になります。

本番の入試は、部活で言えば公式戦、模試を受けることや過去問を解くことは練習試合を行うことと同じになります。とすると教科書はその部活競技のルール、教科書の問題や問題集の問題を演習することは、日々のトレーニングに相当します。

日々のトレーニングを行うことは当然ですが、過去問を解いて経験をなるべく多く積んで、良い結果が出るように頑張ってください。

# 一般入学試験 数 I / 数 I・数 A (B日程) 講評

## 【出題のねらい】

出題範囲は、A日程と同様で「数学 I」または「数学 I・数学 A」。大問数は5問で、第1問～第3問は「数学 I」からの出題で必須問題、第4問と第5問が選択問題になっています。第4問は「数学 I」、第5問は「数学 A」からの出題で、いずれか1問を試験会場で選択解答します。試験時間は60分、解答方式はすべてマークシート方式です。

出題内容もA日程とほぼ同じですが、第1問は「無理式の計算」、「式の値」、「絶対値付きの不等式」、「2次方程式」に関する小問4題。第2問以降は「図形と計量」、「データの分析」、「集合と論理」、「図形の性質」からの出題で、難易度も易～標準、A日程と同様に、主に高等学校の教科書の基本的な内容の理解を問う出題でした。

## 【解答状況および解説】

第1問は、数学 I の式の計算や方程式に関する小問集合です。

(1)は、2重根号と分母の有理化に関する計算問題。まずは、 $\sqrt{7 \pm \sqrt{24}} = \sqrt{7 \pm 2\sqrt{6}} = \sqrt{6} \pm 1$  (複合同順) として、分母の2重根号を外し、次に2つの式の分母・分子にそれぞれ  $\sqrt{6} \pm 1$  をかけて、分母を有理化しますが、もともと分子が5になっているので、計算しやすい問題です。

(2)は、初めに与えられた2次方程式の解を求めて、値を求める式に代入すると面倒になるので、 $x(x+1)(x+2)(x+3) = (x^2+3x)(x^2+3x+2)$  としてから  $x^2+3x=1$  を代入してしまえば簡単に解ける問題。入試の典型的な問題ですが正解率は高かったです。

(3)の絶対値付きの不等式は、絶対値記号内の2次式の符号を場合分けすると大変になります。 $|X| \leq a (a > 0)$  とは、 $X$  の大きさが  $a$  以下ということですから  $-a \leq X \leq a$  と同じになることは確認しておきましょう。 $-3 \leq x^2 - x - 3 \leq 3$  としたら、あとは連立不等式  $\begin{cases} -3 \leq x^2 - x - 3 \\ x^2 - x - 3 \leq 3 \end{cases}$  を解くことになります。

(4)は、2次方程式の応用問題。初めは因数分解を利用して2次方程式の解を求める最も基本的な問題です。後半は  $X = x^2$  とおいてしまえば前半の結果から  $X$  の値は明らか。後は、「正の解の総和」に注意して解答すればよいのですが、高い正解率でした。

第2問は、(1)が余弦定理と面積の公式に関する基本問題。この2つの定理と正弦定理を単純に使う問題は必ずできるようにしておいて下さい。得点源になります。(2)は三角形の内角の2等分線、余弦定理の応用、面積の公式の応用の3題です。1つ目の2等分線の長さを求める問題は、入試では基本レベル。2つ目の辺  $BE$  の長さを求める問題は、入試の標準レベル(教科書の応用レベル)になります。最後の線分  $AD$  と  $DE$  の長さの比を求める問題は、三角形の面積を利用する応用問題で、入試では頻出ですが、やや難しかったかもしれません。

第3問は、2つの変数  $X, Y$  に関する問題で、それぞれの「平均」、「分散」に関しては正解率は高かったです。変数が2つある問題ではさらに、「共分散」、「相関係数」まで計算させる問題が多いで

すが、データの個数が多く計算が複雑になる問題はほとんどないので、本問程度の簡単な数値のもので練習しておくといえでしょう。 $X, Y$  の分散がそれぞれ、 $V_X, V_Y$  共分散  $V_{XY}$  がである場合、相関係数  $\frac{V_{XY}}{\sqrt{V_X V_Y}}$  ( $\sqrt{V_X}, \sqrt{V_Y}$  はそれぞれ  $X, Y$  の標準偏差) あたりまでは是非とも確認しておいて下さい。

第4問は数学 I の2次関数の最大・最小に関する標準問題。(1)は  $a=3$  としているので、「2次関数  $f(x) = x^2 - 6x + 11$  の  $1 \leq x \leq 4$  における最大・最小値を求めよ。」という基本的な問題になります。このレベルの問題を確実に得点することが大切ですが、高い正解率でした。(2)は文字定数  $a$  が含まれたままになります。 $1 < a < 2$  だから、2次関数のグラフの軸 ( $x=a$ ) の位置が、定義域  $1 \leq x \leq 4$  内にあり、かつ定義域の中央の値  $\frac{5}{2}$  よりも左にあるので、 $x=a$  のとき最小値、 $x=4$  のとき最大値をとることになります。(3)では、グラフの軸の位置が定義域の左外側に外れるので、 $x=1$  のとき最小値、 $x=4$  のとき最大値をとることになります。第4問は、与えられた式がやや複雑で難しそうに見えるのですが、60%以上の正解率で受験生の学習のあとがうかがえる結果でした。

第5問は、A日程は整数問題でしたがB日程は図形の性質で、正五角形に関する問題になります。正  $n$  角形の1つの内角の大きさは  $180^\circ \times (n-2) \times \frac{1}{n}$  になりますが、 $BC=CD=DE$  だから、正五角形の外接円を考えると  $\angle BAC = \angle CAD = \angle DAE = \frac{1}{3} \angle BAE = 36^\circ$  になることがポイント。(2)では、正五角形  $ABCDE$  の1つの対角線  $AC$  の長さを  $x$  とすると対角線  $BE$  の長さも同じ  $x$  であり、線分  $FE$  の長さは正五角形の1辺の長さ2に等しいので、 $BF=BE-FE=x-2$  となるのですが、マークシートなので、 の2は答えやすい設問です。この後は、三角形の相似を利用して  $x$  の2次方程式を作り  $x$  の値を求めるのですが、有名な問題なので是非とも解法を確認しておいてください。

(3)は、対角線  $AC$  の中点を  $M$  とすると、 $\cos \angle BAC = \cos 36^\circ = \frac{AM}{AB}$  であり  $AM = \frac{x}{2}$  ですから、対角線の長さ  $x$  を求めることができれば簡単な問題で、 $\cos 36^\circ$  を求める誘導問題の典型になります。

## 【受験生へのアドバイス】

A日程の講評でも述べましたが、まずは、教科書レベルの問題は確実に解けるようにして、教科書準拠の問題集(教科書傍用問題集)の問題を解くことによって公式を使えるようにしましょう。数学は「暗記科目」ではないと言われます。例えば、第2問の三角比の図形への応用の問題は、まずは余弦定理を用いますが、「余弦定理とは…」と説明できることも大切ですが、入試では余弦定理を用いて辺の長さや角の大きさを求めることが要求されます。つまり、問題は解けるかどうか大切になります。高校の教科書に練習問題や章末問題が掲載されていたり、学校から配布された問題集には沢山の問題が収められているのは、問題演習を通して公式を活用できるようにするためです。

本学の過去問題は、一般的な入試問題の典型問題が出題されていて、これら演習することによってかなりの実力アップがはかれます。過去問を解くことで自分の弱点や不足している知識を確認することもでき、弱点に関しては教科書の問題や問題集の問題を演習することで公式を自分のものにして、良い結果が出せることを切にお祈りしております。